

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	Share, ‘共有の精神’ についての一考察
Author(s)	小田, 朗美
Citation	ニダバ , 8 : 23 - 31
Issue Date	1979-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046387">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046387</a>
Right	
Relation	



## Share, ‘共有の精神’についての一考察

小 田 朗 美

### は じ め に

『ニダバ』5号(1976)<sup>1</sup>でPlayという一語のもつ深い文化史的意味を考察した。この小論ではShare, ‘共有の精神’について考察したい。この語の中に西洋文化の一つの精神が、可成りの程度に集約されていると思うからである。従ってこの考察は文化的考察であると同時に、用例をもとにした意味論的考察であり、give and take と対照するものである。それは同時に英語教育の基盤を作ると考えている。

### I

アメリカ留学中、わたしは幾度となくアメリカ人の家庭に食事に招待された。特に勤労感謝の日やクリスマスになると、彼等はきまって、“Let’s share the dinner”とか、“Let’s share Christmas”と言った。わたしのような貧乏学生にはこの上もなく有難い招待であった。わたしに限らず、外国人留学生は、よくアメリカ人家庭に招待された。勤労感謝の日一人で孤独に過している人があってはならぬと言うのが、アメリカ人の習慣のように聞いていた。或アメリカ人教師にその点を確認めると、正にその通りである。彼女は子供の頃、勤労感謝の日の正餐のテーブルに着く前に、必ず母親に頼まれて、近所の一人暮らしの老人に食事を届けたそうである。その精神はShareの精神である。

わたしは三人の養子(adopted children)を育てているアメリカ人夫妻から、“We are sharing (our love)”と言うのを聞いたこともある。つまり養子を育てることによって、彼等は親になれるし、子供は親の愛を受けることができるということだ。

Shareの精神はそればかりではない。英米では一般に、本は図書館でshareするもので、個人が何んでもかでも買い込んでくる必要はないと考えられている。昭和53年10月19日付の『朝日新聞』が、英国の出版事情を説明した新聞週間の広告の中で、その点について触れている<sup>2</sup>。手作りを主張する人がないではないが、どちらかと言えば、日本では昨今買う文化が定着している。同じことは、学者の研究について言える時がある。わたしは昨年のJACETハワイセミナーと、今夏のイギリス研修でそれを経験した。この二つの研修は、いずれも大学英語担当教員ばかりのグループで参加したのだが、外国人の研究成果を買おうとしてことわれる或日本人の姿を見た。日本程翻訳ものの多い国はないかも知れない。

一般に西洋では美術品等も Share するもので、個人が狭い家の中に集めてくることをしない。ヨーロッパの町を歩くと、町全体が美術館か博物館のような印象を受ける。事実そうになっている町もあるようだし、一つ一つの町に顔がある。大きな美術館や博物館は入場料が無料で、容易に美術品を Share 出来る場合が多い。広々とした緑の公園も手近かにある。イギリスの Kew Garden の入園料は、1978 年夏何んと一ペニーだった。一ペニーは今のレートで 4 円弱だ。勿論無料の所も多い。日本では空間への線の引き方が違うようで、自然をこわして家の囲りに作り直して庭とし、そこに高い塀をめぐらして、持ち主だけがその庭を楽しむようになっている。わたしには西洋の方が共有の精神に富んでいるように思える。

ゲームにしてもそうだ。パチンコは考えてみると面白いゲームではないか。多勢の人々が同じ所に集まっており、側を通ると音楽や玉のはじける音が賑やかではあるが、一人で楽しむゲームのように思われる。お稽古事は女性が一人で楽しむことから始まっているように思われる。精神的自由は必要だし、一人で楽しむことによって人生を歩む力を得る人があれば、それもよい。しかし日本文化と西洋文化の違いを痛感する。

古くは日本の農村等に共有の精神があったようで、農機具、労働、時間等を提供し合った。しかし今迄触れたような共有の精神は、概して西洋に比べて日本の方が弱いように思う。共有することには良い面もある代りに、共有したために起る人間関係の複雑さがあり、それを好まないのだろう。次のような英文もそれを証明している。

Where there are a thousand people sharing an acre, they have to take greater pains not to get into each other's way than where it is shared by three. 3

注：この論文中の share の下線はすべて筆者による。

日本で言う自己と他者との調和は、建前と本音、外者と内者の間で、実質的には大きな食い違いを持っている場合が多い。個人の確立を社会の第一歩としている西洋に、わたしはしばしば share の精神をみる。

考えてみると、文化とは社会における shared patterns of believing, responding, feeling, and acting among people である。唯文化によってその型は同じではない。別技篤彦氏は、「東南アジアの理解のために」の中で次のような文を書いている。

……これらの村落には内部の緊密な相互扶助制度がある。同じ村に住む限り、たがいに乏しさを分けあういわゆる“共貧社会”形成の強いきずなである。(p. 5)

つまり貧しさに対して取るアジアの人々の共通した応じ方について述べているわけで、貧しさを share していると言える。

又コミュニケーションの基本は、感情、考え、意見、判断等を share することだ。Taylor 等は 4 evaluative relationships でのコミュニケーションでは、個人は評価や判断を share することにより、自己の一部を share するけれども、依然として他者指向が強いといっている。自己と他者との積極的な関わりが認められないことである。Taylor 等はその点を“sharing of self is not intentional”(p.173)

と表現している。彼等は更に最も好ましい状態は“ shared feelings ”にあるとしている。

A fourth level of relationships involves sharing feelings, communicating how you feel about situations, events, ideas, and people. At this level you really begin to share yourself with others. Communicating at this level is an important step in deepening relationships, because when you report a feeling rather than a judgment, two things happen. First, because an important aspect of self has been shared, trust can grow. Second, because you do not judge the others or events in the situation but simply report reactions, the effects in others differ greatly. . . . . the judgment concentrates on the other person and evaluates the behavior. (p. 173)

しかし前にも述べたように sharing に問題がないわけではない。次の点に注意を要すると指摘している。

“ Purposes usually need to be shared for a relationship to reach the level of shared feelings. ” (p. 175)

松本道弘氏は『 Give と Get : 発想から学ぶ英語 』の中で、英語の精神の中核は give と get , つまり give と take の精神で貫かれていると言う。それはロジックの精神であり、英語学習者はこのロジックを徹底的に学ばなければならないと指摘している。give and take の裏には、独立した個人の存在があり、自他は互いに敵対していることがわかる。利益が一致しなければ、両者は反発する。個は互いに批判し合うことに耐えねばならぬ。前述のコミュニケーションでも、相互理解の場で、先ず相手に判断を下す態度である。自分が take の側にまわろうとする態度であろう。増田光吉氏が若い世代の人々は「親が自分を大切にしてくれたから将来は自分がお返しをしよう」という考え方をして、「たとい親が親らしくなくても、子どもは親を敬い、心をつくして養う」というのとは変って来たことを指摘している<sup>5</sup>。情緒的相互依存の形態ではなく、ロジックをもとにした親子関係である。日本人の間では妙なところで take and take になったり give and take になったりする。

コミュニケーションで sharing が強調されたのは、take の側ばかりに回らないで、相手が take する、つまり相手の取り分を許す姿勢のように思われる。ロジックによってではなく情感によって取り分を分けようとする精神が share の精神だと考えられる。次の英文はよくそれを物語っている。

This wedding of academic freedom with public responsibility works for most of the time, but sometimes throws up problems and difficulties which are the essence of adventure, particularly a shared one. The producers operate with academics, each eyeing the other carefully; usually, I believe, affectionately. 6

この文は、イギリスの Open University が academic freedom と public responsibility をもつ放送との協同事業であることを述べているわけだが、下線部が両者の sharing の関係をよく表している。

更に次の文は give and take の内包する意味を、最もよく表していると思うので引用する。

Humility, or truth, is necessary not only for our personal well-being, but especially in our relationship with others. It is here in the concrete "give and take" of our everyday lives that God's will is most clearly manifest to us, and it is here that we come in contact with him very directly through our neighbor.<sup>7</sup>

つまり、give and take では、快い、安楽なものばかり取るわけにいかぬことを暗示している。逆に不快なもの、困難なものも取らねばならない。それらを取ることができぬ時、I can't take it. が出て来るわけだ。この引用ではそこにこそ、神の愛を我々が必要とすると述べている。

## II

では、用例からもう少し share の意味的考察を続けよう。

1. . . . she, too, has been sentenced to share her wedding bed not with Romeo, but with death.

-- "Romeo and Juliet," in Shakespeare's Tales Retold, p.15.

2. Bullock-drawn carts and a tricycle-taxi share a crowded street in New Delhi.

-- As the note of a photo, in The Study of Current English, April 1978, p.2.

3. . . . there are meanings which I can convey linguistically to one of an alien tongue which I cannot convey to some of my fellow countrymen with whom I share a common speech.

-- Language and Reality, p.238.

4. The traditional grammar, however, sometimes provide a kind of definition: a sentence is the expression of a complete thought. But this notional and shares all the faults of the notional definitions that we discuss. . .

-- Grammar, p.71.

5. Two sentences may be conjoined if one is relevant to others, or if they share a common topic.

-- If's, And's, and But's about Conjunction, " p.118.

6. The (a) and (b) senses of these verbs [ succeed and fail ] share their implications. .

The feature [ actively trying ] thus characterizes the presuppositions of these verbs, taken in their subject-predicative sense. With respect to the time axis, they share the backward presuppositions of the others: the action takes place prior to the time-axis. Succeed also shares the time axis implication of end: . . .

-- "Forward Implications, Backward Presuppositions, and the Time Axis of Verbs, "

pp. 34 - 35.

これらの例でわかることは、shareの主語が必ずしも生物主語でないことだ。1～3の例は今迄指摘したような、情感によって分けて取ると考えても支障ないだろう。しかしもっと直接的には「共に使う」という意味である。4～6の例では、同様に「その意味を分け持っている」と考えられなくはないが、もっと直接的には「共通して持っている」という意味である。

次の例ではどうであろうか。

7. In Bangkok, you can now buy a baby for the price of a mono television--with no questions asked. In Korea, you can get one for adoption from a charity that exports 3, 000 a year. In Bangladesh, the baby market is just taking off. The international baby business is already big business--a growth industry in which we as adults, all hold moral shares, but of which we know far too little.

-- "Babies : an East-West Export," p. 322.

8. Any honor we can pay Thomas Hardy must seem trivial and inadequate, but it is, nevertheless, sincere and by sharing it with you we hope to enhance our mutual enjoyment.

-- "An Address," p. 7.

9. If an artist wishes to make you relive the experience of rain by sharing in his wordstimuli, he must operate consciously on the medium and galvanize you into fresh awareness, the more powerfully since words are so much a part of your everyday experience. . . .

-- "Language and Poetic Creation," p. 35.

10. How, then, are income and wealth shared among us?

-- "Class-Ridden Prosperity," p. 79.

11. The Japanese still remember their traumatic collapse at the end of World War II, the intense hostility of the rest of the World at that time, and the long success of their "low-posture" policy. It is not easy for them to shift to a still untested positive policy of shared leadership in behalf of international cooperation, even though such a policy would better fit their needs and their abilities. . . .

-- "Japan's Future in a Changing World," p. 35.

いずれも、shareは分け前か、分けて取る意で、takeの意味だろう。Iの項で、shareをgive and take と対比して来たけれども、shareは今仲よく分けて取る意として使用されている。

shareは取り分ばかりでなく、出し分を意味する。言い換えるならば、giveの意味になる。

12. Please share your experience abroad with us.

13. Let us share in your experience abroad.

例12では、「分け前を与えてくれ」、例13では、「お互いに分け前を取ろう」の意である。

14. I want to share the apple with children.

の文では、「分けて与える」意味が強い。子供から何も取ることを期待しないだろうが、Iは精神的喜びを味うかも知れない。12～13～14のいずれにおいても、分ち合う者同志の情感の流れはあるだろう。

前に述べた勤労感謝の日の招待や、歳末助け合いは、この種の share である。Fair shares during Ox'fam week という、イギリスの広告の見出しと、説明文の一部を引用してみる。

15. "Sharing. It Means More to Some than Others."

There are many different ways you can share. By giving up some little luxury like the ones depicted above and sending the money you save to us.<sup>8</sup>

説明文の動詞、giving upと sendingから、この share は give であることがわかる。

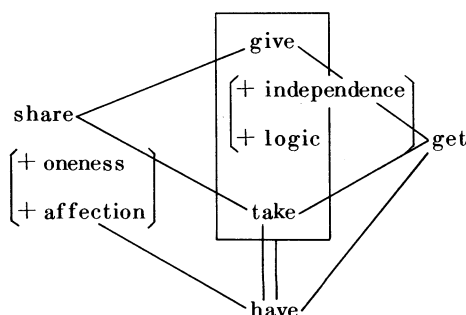
先に指摘したように、shareの精神はキリスト教の精神であるが、最近では、自己対神という一對一の祈り方に対して、共に祈る形式がある。We share the prayerとなる。祈りの行き交うことを願っていることがわかる。

16. We share ideas at the meeting.

17. We share love. (We share family happiness. We share family life. We share ourselves and things.)

16.17の例ではIの項で指摘したように、giveと takeの交換が愛情によって行われることがわかる。初めに触れたアメリカ人夫妻と養子との関係はこれによって説明できる。

ここで今迄述べて来たことを要約してみよう。



上図で述べたい点は、giveと takeの核は対立する個を前提として、ロジックから、どちらかと言えば、自分を守る為に相手に批判的になり、自分の取り分(take)を主張する傾向があるのに対して、shareは個の存立を認めながらも、愛情によって、自他が統一の方向に向えるように、自分の取り分を減らして、他の取り分(つまりそれは give となってくる)を認めることである。従って share の意味の中には、take, give, give and take が内包されなくてはならないと同時に、give and take の independ-

ence と logic に対しては, oneness と affection が対立的な意味素性となるに違いないということである。have in common とか use together も, 元来今説明した give and take の関係にある share ではないかと思われる。

おわりに:

share という語は, 現実には非常にしばしば出会う言葉である。英語の精神を説明する立場からいっても, 重要な言葉だと思う。しかし, 中学校・高等学校の英語科の教科書では殆んどお目にかからない。<sup>9</sup>

これで share のすべての説明が終わったわけではない。share の現れる構文の研究には未だ触れていない。share は, 主として

(a) S share O ( with NP )

(b) S share in ( NP )

の二つの構造を取っているが, S. O. NP の位置を占める名詞の種類については, それぞれどのような制限があるのか, 更に研究を必要とする。

しかし, 英語教育の場で, 同じ意味領域の語を単語家族<sup>10</sup>として扱うことが出来れば, give, take, get, share, have 等は同時に扱えたらよいと思っている。

## 注

1. 『ニダバ』第5号(1976), pp. 17~32 を参照されたい,
2. 伊藤三郎 「お堅い, 英国読書人気質: 豊かな国際感覚, “ツン読” 習慣なし」 『朝日新聞』 昭和53年10月19日 p. 12
3. Lord Kennet, “Town Life,” in Expressing Your Thoughts in English, Ed. by Koh Kasegawa and Tsuyoshi Amemiya (Tokyo: Kinseido Ltd, Showa 40), p. 16.
4. Anita Taylor, Teresa Rosegrant, Arthur Meyer, and B. Thomas Samples, Communicating (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1977), pp. 173-175.
5. 増田光吉 「親を養う: ホンネは「ギブ・アンド・テイク」」 『朝日新聞』 昭和53年11月29日 p. 16
6. Robert Rowland, “The University in a Palace,” in The Listener, 17 February 1977, p. 198.
7. Miriam Louise Gramlich, I. H. M., “In Our Image and Likeness,” in Review for Religious, Volume 37 Number 5, September 1978, p. 735.
8. John Arnold & Jeremy Harmer, Advanced Writing Skills (London: Longman, 1978), p. 125.
9. 次の教科書を参考に調べた。すべて昭和53年度版である。

New Horizon English Course 1, 2, 3.



New Total English Course 1, 2, 3.

New Everyday English 1, 2, 3.

New Prince English Course 1, 2, 3.

The New Crown English Series 1, 2, 3.

The Crown English Readers One, Two, Three.

The New World Readers I, II, III.

この教科書 I に一例だけ share があった。

“ In 1777 he [ Benjamin Franklin ] was sent to France to get help for the colonies in the war with England. Too much credit cannot be given to Franklin for his share in helping to win the American Revolution. He stayed in Paris for nine years, and worked for the cause of the colonies without thought of his own strength or health. ” p. 97.

10. 昭和53年11月10日 Professor A. P. Cowie は “ Vocabulary Learning as Problem Solving ” と題する講演を、ノートルダム清心女子大学で行った。その中で単語家族と言う用語を用いていた。

## 参 考 文 献

別枝篤彦 『 モンスーンアジアの風土と人間 』 泰流社 昭和52年

——— 「 東南アジアの理解のために — 風土・民族・歴史を中心として 」 『 国際理解のひろば 』

№4 国際教育情報センター 1978年 pp. 2-11

松本道弘 『 Give と Get : 発想から学ぶ 』 学苑社 昭和50年

## 資 料

次の書物から例文を集めた。

Arnold, John & Jeremy Harmer. Advanced Writing Skills. London: Longman, 1978.

Givón, Talmy. “ Forward Implications, Backward Presuppositions, and the Time Axis of Verbs, ” in Syntax and Semantics. Vol. I. Ed. by John P. Kimball. Tokyo:

Taishukan Publishing Co., 1972. pp. 29-50.

Gramlich, Miram Louise, I. H. M. “ In Our Image and Likeness, ” in Review for Religious. Ed. by Daniel F. S. Meemam, S. J. and Others. Volume 37 Number 5. September Issue. St. Louis, Missouri: Review for Religious, 1978. pp. 730-735.

Halsey, A. H. “ Class-Ridden Prosperity, ” in The Listener. 19 January, 1978. pp. 77-80.

Kennet, Lord. “ Town Life, ” in Expressing Your Thoughts in English. Ed. by Koh

- Kasegawa and Tsuyoshi Amemiya. Tokyo: Kinseido Ltd, Showa 40. p. 16.
- Lakoff, Robin. "If's, And's, and But's about Conjunction," in Studies in Linguistic Semantics. Ed. by Charles J. Fillmore and D. Terrence Langendoem. New York: Holt, Rinehart and Winston Inc., 1971. pp.114-149.
- Mangold, Tom. "Babies: an East-West Export," in The Listener. 18 March 1976. pp.322-324.
- Milward, Peter. "Romeo and Juliet," in Shakespeare Tales Retold. Tokyo: Azuma-Shobo, Showa 49. pp. 5-24.
- Palmer, Frank. Grammar. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books Ltd., 1971.
- Reishauer, Edwin O. "Japan's Future in a Changing World," in Language and Culture. Ed. by JACET. pp. 31-39.
- Rowland, Robert. "The University in a Palace," in The Listener. 17 February 1977. p. 198.
- Schlauch, Margaret. "Language and Poetic Creation," in The Gift of Language. Ed., with notes, by Masanori Toyota. Kyoto: Appollon-sha, 1974. pp. 28-70.
- Taylor, Anita, Teresa Rosegrant, Arthur Meyer, and B. Thomas Samples Communicating. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1977.
- The Study of Current English. April Issue. Kenkyusha. 1978.
- Urban, Wilbur Marshall. Language and Reality: The Philosophy of Language and the Principles of Symbolism. Repinted. Freeport, New York: Books for Libraries Press, 1971.
- Wightman, Tom W. "An Address," in Thomas Hardy Festival: Official Handbook. Dorchester: The Thomas Hardy Society Ltd., 1978. p. 7.